

進捗状況報告シート

(2011年度・大学)

担当部局は ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

対象部局	言語コミュニケーション文化研究科
大項目	0 理念・目的 (研究科)
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員 (教職員および学生) に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 自己点検・評価(2010.5.1~2011.4.30の進捗状況報告)

《目標・指標》

本項目において、2009年度~2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の評価を行っている。進捗評価はA~Dの4段階とし自ら評価した。A~D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 総合的・実践的な学問分野として言語コミュニケーション文化学の確立を目指す。	→教員の研究成果をネット上で公表。		A			
2. 変化する国際化社会の中にあつて、活躍できる実践力を備えた高度職業人を養成する。	→課程修了者数。進路調査・満足度調査。		A			
3. 国際的に活躍できる研究者・大学教員を養成する。	→進路調査の実施(研究者数)。国際学会での発表回数(追加)		B			
			☆			

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《現状の説明》 ※ 全小項目について記述が必要

小項目0.0.1	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。 (理念・目的の設定の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→ ● 理念・目的を設定している ○ 理念・目的を設定していない (理念・目的) 言語学、文化研究、言語教育学、教育法研究など多様な分野を包括する総合的な学問分野として言語コミュニケーション文化学の確立を目指すとともに、言語コミュニケーション文化学を専門とする研究者、高度職業人を養成する。 (説明) 言語コミュニケーション文化学の立場から、各教員はそれぞれの研究領域(言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学)において、活発な研究活動を行い、研究者、高度職業人の養成を行っている。2001年開設以降、修士号235名、博士号(課程博士)は7名が取得している。本年度の前期・後期修了生の26名の内2名が大学教員、13名が高度職業人となった。
	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。 (周知・公表の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→→→→→→→→ ● 周知・公表している ○ 周知・公表していない (説明) 各教員は各研究領域(言語科学、言語文化学、言語教育学、日本語教育学)において、研究発表を行い、その成果を本学の研究業績報告書に掲載している。大学構成員には、広報誌、大学のホームページを通して、研究科の理念を周知させている。年3回、社会人を対象に講演会・入試説明会を行い理念を社会へ公表している。
	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。 (検証の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→→→→→→→→ ● 検証している ○ 検証していない (説明) 研究科の理念や目的の点検は、研究科内に自己評価委員会を設置し、定期的に行っている。
その他	

《評価指標データ》

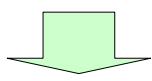
本学の育成した人材(卒業生)に対する社会(企業)の評価
 卒業生がどの程度スクールモットー(マスタリー・フォア・サービス)をどの意識しているか
 卒業生のうち、自分の子供等、身内に関学への進学を勧めたいと思う人の比率
 卒業生のうち、自分の子供等、身内に関学への進学を勧めたいと思う人で、「スクールモットーに共感できる」ことをその理由とする人の比率
 在学生のうち「この大学で人生の一時期を過ごすことが、将来にとって役立つと思う」人の比率
 理念の周知について(1)ー理念・教育目標を宣布する発行物・行事などの種類・数
 理念の周知について(2)ー総合コース「『関学』学」の履修者数

☆ 追加データがあれば追加してください。

◎効果が上がっている事項 ※目標の進捗評価が「A」の場合は必ず記述してください。

《点検・評価(1)》効果が上がっている事項 注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

小項目0.0.1	各研究領域における教員の研究成果の発表。研究者、高度職業人の養成。
小項目0.0.2	研究科広報誌「Graduate School of Language, Communication, and Culture」の発行(年1回)。ネット上での研究発表の成果公表。社会人を対象とした講演会を年に3回実施。入試説明会を年に6回実施(学内3回、学外3回)。
小項目0.0.3	自己評価委員会を設置し、理念や目的を定期的に検討している。
その他	



【次年度に向けた方策(1)】伸長させるための方策

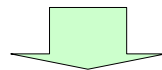
注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

小項目0.0.1	さらに多くの研究者、高度職業人を養成するためにも入学者数を確保する。
小項目0.0.2	本学の学部生を対象にした推薦入試の実施およびダブルデグリー入学者を増やすことによって多様な人材を入学させる。
小項目0.0.3	
その他	

◎改善すべき事項 ※目標の進捗評価が「D」の場合は必ず記述してください。

【点検・評価】(2)改善すべき事項 注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

★	小項目0.0.1	
	小項目0.0.2	
	小項目0.0.3	
	その他	



【次年度に向けた方策(2)】改善方策

注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

★	小項目0.0.1	
	小項目0.0.2	
	小項目0.0.3	
	その他	

◎自由記述

【点検・評価】&【次年度に向けた方策】

★	その他 (自由記述)	
---	---------------	--

Ⅲ. 学内第三者評価

<評価専門委員会の評価>

【学外委員】

○研究科の理念・目的の実現に向けて積極的な努力が行われています。

【学内委員】

○自己点検・改善のサイクルが機能しているものと判断されます。

○理念・目的の設定に関し、相応しい内容と判断します。ただし、HP

(http://www.kwansei.ac.jp/g_language/g_language_000434.html)では、人材養成の目標が示されており、研究科の理念・目的が示されていません。

○理念・目的、周知・公表、検証はいずれもしっかりと実施され、記述も簡潔で適切です。ただ、周知・公表については、研究発表を通じて理念・目的を周知・公表していることが分かりづらいと思います。また、ホームページは学外への公表も担っていることを説明されればと思います。

○効果が上がっている事項、小項目0.0.1は、「4 教育研究組織」「5 学生の受け入れ」での内容だと思われます。理念・目標に繋がるものであることは理解できますが、本項目は「理念・目的が適切に設定されているか」という視点で記述してください。

○効果が上がっている事項の記述は現状説明での内容ではないでしょうか。

○目標の進捗評価が「A」のものが多く、着実に取り組まれていることが伺えます。ただ、設定されている目標は、目的といえるものです。より具体的な目標を設定されることをお考えください。

【大学基準協会：評価に際し留意すべき事項】

○小項目0.0.1

基盤評価：「学部、学科または課程ごとに、大学院は研究科または専攻ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則またはこれに準ずる規則等に定めていること」「高等教育機関として大学が追求すべき目的を踏まえて、当該大学、学部・研究科の理念・目的を設定していること」

達成度評価：「建学の精神、目指すべき方向性や達成すべき成果等を明らかにし、当該大学、学部・研究科の理念・目的として適切である」

○小項目0.0.2

基盤評価：「公的な刊行物、ホームページ等によって、教職員・学生、受験生を含む社会一般に対して、当該大学・学部・研究科の理念・目的を周知・公表していること」

達成度評価：「理念・目的の周知・公表に関する各種方策（周知・公表の有効性や方法の適切性等の定期的な検証・改善など）をとり、当該大学に対する理解向上につながっている」

○小項目0.0.3

基盤評価：なし

達成度評価：「検証を実施する体制を整備し、責任を明確にするなどしたうえで、理念・目的の適切性について、恒常的かつ適切に検証を行っている」

Ⅳ. 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

効果が上がっている事項、小項目0.0.1:

★ 院生は、本研究科の理念である言語コミュニケーション文化研究の観点から修士・博士論文を書いており、本年度は、中国・北京第二外国语学院での国際会議をはじめ、いくつかの国際会議で12名の院生が研究発表を行った。